ヴァーノン・リー女史に関するノート

矢本貞幹

ヴァーノン・リー (Vernon Lee) 女史と言っても，知っておられる人は少ないであろう。ヴァーノン・リーとはペン・ネームで，本名をヴァイオレット・パジェット (Violet Paget) と言い、前世紀末から今世紀はじめにかけて批評や随筆を数多く発表したイギリスの文学者といえば，知っている人がいくらか多くなるかも知れない。

もう少し詳しく言えば，リー女史は1856年イギリスに生まれ，少女時代をローマに育ったが，その後イギリスに帰国してからは，しばしばイタリアに遊んだ。ルネサンス芸術の研究を手初めとして18世紀のイタリア文学の研究，修辞学的な文学論，美学評論などを発表した。そのほかに小説や旅行記を書き，とくに随筆には出色の作が多かった。1935年死去。

その80年近い生涯のうちに，いまのべたように多方面にわたる著作を30数冊も刊行している。今日すでにその大部分が手に入らないけれども，わずか数冊の著作からうけた感銘が深かったから，それを書いておこうと思う。研究論文というほどではなく，単に私のうけた印象の覚え書きにすぎない。あらかじめ御諒承を願う。

ヴァーノン・リーの著作の中で私がいちばんはじめに読んだのは「土地の霊」'Genius Loci' と題する一文であった。それは *Genius Loci: Notes on Places* (1905) という本の巻頭に収められた短かいエッセイであるが，最初に読んだとき，この散文詩のようなエッセイにすっかり魅了せられた。当時私は20歳を越えたころであった。（どうしてそのようなエッセイを読むにいたったのかいきさつに関しては，昨年（1978年）10月の『英語青年

創刊八十周年記念号』に古い思い出を書いたので，ここでは省略したい。）私の心をひいたこのエッセイの書き出しを引用すれば，次の様である。

> "It had rained heavily, that last day at Verona, and cleared up in the afternoon. I bought a bunch of lavender for remembrance; and had some coffee, before starting, in Piazza dei Signori. The stones were still wet, but the sky clear. Moist clouds were sailing above the towers; the town pigeons pecking on the pavement and flying into the palace crannies; swallows screaming; the sun, invisible behind roofs, was setting. 'Tis at this hour, to the sound of bells, that the genius of old cities seems to gather himself up and overcome one's heart."

私が若いころ感服したのは，平易な，実に読み易い英文だったからである。何しろおぼつかない英語だったから，それも無理はないと思う。しかしその後何年かを経てから読んだとき，このエッセイの魅力がいくらかわかってきた。平易というだけではなく，簡潔な文章の中に情意が深くこめられている。行文をたしかめるために翻訳を試みたこともあった。

「ヴェロナにわかれる日，雨がひどく降っていたけれども，午後になって晴れた。記念にラヴェンダーの花を一束買って，出発する前にシニョーリ広場でコーヒーを飲む。敷石はまだ濡れていたが，空は晴れた。雨雲が塔の上を流れ，町の鳩は舗道についばみ，あるいは城壁の割れ目に飛び，燕は鳴き声を上げ，太陽は屋根の向うに沈んでゆく。こういう時に，古都の霊が鐘の音につれて立ちあがり，人の心を圧倒するのである。——意味は伝え得たであろう。が，"pigeons pecking on the pavement" とか"swallows screaming" など頭韻をきかせたリズミカルな文章は面影をうしなった。これは仕方がないことだが。

主題の扱いかた，文章の構成法に注意してみよう。著者は「土地の霊」などという耳なれない，何だかよくわからない主題を持ってきて，いきなり最初の一節の中に据えた。しかも古都にしばらく滞在してそこを離れる午後，訣別の情が湧くのをさりげなく述べるとともに「土地の霊」を語る。

では，「土地の霊」とは何であるか。われわれがどこかあるところへ行

ったとき，そこの歴史とか住民とかには関係なく，その土地に対して非常な親しみを強く感ずることがある。人間どうしが親しく交際したり助け合うといったように実際的な関係ではない。ある場所においてそこにかくれた霊の如きものと交感すると，精神の高揚を感じて何か幸福な感情にひたるのである。「土地の霊」は人間の姿のように眼には見えないけれども，心情にうったえてくる精神的な実在と言ったらよかろう。

たとえば，遠くに山脈を見渡す峠の路でもよい。川の流れが合流して河岸の道がまがっているところでもよい，大きな河口なら更によい，ヴァージル (Virgil) の詩句のように「古都の城壁を洗って流れる川」もよい，その場所に感動して「ああ，ここに土地の霊がひそんでいるのだ」と思わず声を発するのである。こういうことを叙述する著者の筆致，なかなか巧みなので，このあたりの原文を次に引いておこう。

> "He is immanent very often, and subduing our hearts most deeply, at a given turn of a road; or a path cut in terraces in a hillside, with view of great distant mountains; or, again, in a church like Classe, near Ravenna; most of all, perhaps, in the meeting-place of streams, or the mouth of a river, both of which draw our feet and thoughts time after time, we know not why or wherefore. The genius of places lurks there; or, more strictly, *he is it.*"

現在生きている友人たちとの友情と似た性質を持ちながら，やっぱりそれとはちがった，目に見えないはたらきをする霊的な存在である。めいめい思い出してみると，そのような土地に対する親しみを持っているだろう。著者は具体的に名指してイギリスの湖畔地方やイタリアのトスカナ地方をあげている。

日本の文学は季節や風景に対して敏感に反応してきたから，土地や風景を親しく叙述した例はいくらもある。ことに自然に対する微妙な感覚は日本文学の特色でもある。ヴァーノン・リーの言った「土地の霊」というのは，あるところの自然に対する微妙な感覚をもっと深刻に，むしろ宗教的な気分を加えて意識的に説いたものだと思う。現にこのエッセイの終りを読むと，ヴァーノン・リーは冒頭の言葉に宗教味を添えて一文の結びとし

ている。——"I suppose it was some silly sentiment of this kind which.... made me buy that bunch of lavender in the market-place of Verona, when the sun was setting, and the swallows whirring, and the bells beginning to ring the presence of the divinity of places."

本稿の冒頭に引用した一節とこの終りとをくらべてもらいたい。言葉をわずかに変えただけで，ほとんどおなじ文章をくりかえして，もう一度主題をたしかめた周到な構文に注意しておこう。

女性らしい繊細な感覚と芸術的，宗教的な眼識をもって書かれた「土地の霊」というこの意識はどこから来たのであろう。たいていの思想や理論はほかの思想や理論と，多かれ少なかれ，何かの関係を持つものである。思想史や芸術史においてまったく新しい，本当にオリジナルな思想や芸術がひょっこりあらわれるということはまずなかろう。独創的といわれる作品にしても，よく調べると，どこかにその原型があったり，他人が一度使った資料を組み換えたというにすぎないものがある。と言っても「土地の霊」の意想の系譜を調べるほどの興味も私にはなかったし，学識もなかったので，長いあいだそのままになっていた。

ところが，それをみつけることができた。少なくもみつけたように思った。10年ほど前，それ以前に長いあいだ読まなかったペイターの『享楽主義者マリウス』(Walter Pater, *Marius the Epicurean*)をふと読む気になって少し進んだときだった。これこそ「土地の霊」の原型ではないかという考えが頭を掠めた。

『享楽主義者マリウス』という本は，二世紀頃のローマを背景として主人公マリウスが成長してゆく過程を描いたものである。マリウスが生まれ育ったいなかはまだ異教的信仰がのこっていて，人びとは五穀の豊穣を祈るためにいけにえを供えたり，大木に宿る精霊を祭ったりしていた。ペイターの原文を引けば，

"A religion of usages and sentiment rather than of facts and belief,

and attached to very definite things and places—the oak of immemorial age, the rock on the heath fashioned by weather as if by some dim human art, the shadowy grove of ilex, passing into which one exclaimed involuntarily, in consecrated phrase, Deity is in this place!" (事実や信仰よりも習慣と感情の宗教で，特定の事物や場所に附属した宗教——たとえば，大昔からの樫の樹，荒地で風雨にさらされながら，どこか人工が加わったような岩，人がそこへ入ってゆくと，思わずおごそかな文句で「神ここにいます」とさけぶような薄暗いそよごの林など。——『マリウス』第一章「ヌーマの宗教」)

少年マリウスは健康を祈願するために，エスクラピウスの神殿に参る。その場所は空気が清く，風物が明朗で，しかも神神しい気分に満ちて人びとの心身をすこやかにしてくれるようなところであった。

"The whole place appeared sensibly influenced by the amiable and healthful spirit of the thing. All the objects of the country were there at their freshest. In the great park-like enclosure for the maintenance of the sacred animals offered by the convalescent, grass and trees were allowed to grow with a kind of graceful wildness; otherwise, all was wonderfully nice. And that freshness seemed to have something moral in its influence."

(その場所全体がやさしい，すこやかな霊の感覚的な影響をうけているようであった。その地方の事象はすべて生き生きとしていた。全快した人たちの捧げた動物をやしなうために大きな公園のような囲いがつくってあったが，そこの木や草はやわらかに力強く成長しているうえに，他のものも驚くほど優美であった。そしてあの清新な気分は何か精神的な感化力を持っているようだった。——同書，第三章「転地」)

古い大きな樹木やそれが生えているところを崇拝すること，自然の事物と人間とが感応して精神的な影響を受けること，あるいは樹木の霊に人間の祈願をこめること，——古代人のあいだでは，いずれも大切な生活様式であった。ペイターは古代人の信仰や生活，ギリシァ神話などを研究したうえ，このような古代人の生活情態を『マリウス』の背景に用いたのであった。そして自然の事物の影響を受けて生きるマリウスの成長過程を叙述

したのである。

ペイターの『マリウス』とヴァーノン・リーの「土地の霊」とを並べて考察するならば，後者が前者からエッセイのヒントを得たことはたしかである。おそらくヴァーノン・リーは師ペイターの作品から自己の主題を思いついてそこから書き出したのではなかろうか。

ヴァーノン・リー女史がペイターと親しい間柄にあったことはペイターの『書簡集』(*Letters of Walter Pater*, ed. by Lawrence Evans) がもの語っている。ペイターの『書簡集』は10年ばかり前，1970年に刊行されたが，1894年に死んだペイターの手紙を数十年経たのちにあつめたのだから，数少ないことはいたしかたがない。そのうえ，ペイターの手紙は日常の生活における用事や寄贈された書物に関するかんたんな感想などを友人，知人にしらせたのが多い。

もとより作家の書簡集というものは、その作家の芸術論や人生観や作品の批評などが特定の宛名の人に語られているのだから，作家の面目がむき出しになっておもしろいところがある。作家を知るにはぜひ読まねばならないのもある。ペイターの手紙にそういう興味を見出すことはできないけれども，ペイターの生活情況や交友関係を知るには必要な一冊である。

その『書簡集』の中に，ペイターがヴァイオレット・パジェット（ヴァーノン・リー）女史に宛てた手紙がただ一通のこっている。日付は1882年3月26日とあるから，ペイター43歳，パジェット26歳のころ。ペイターはすでに9年前，『ルネサンス研究』(*Studies in the History of the Renaissance*) を出版して批評家ペイターの名を認められ，2年後に刊行される『享楽主義者マリウス』を執筆していた。オックスフォード大学につとめ，時時ロンドンに来たり，イタリア，フランスに旅行していたようである。

前に述べたように，ヴァーノン・リーはイタリアで育ったために，20歳をすぎてからロンドンへ折り折り来るようになった。早熟の女史は24歳のとき『18世紀イタリアの研究』(*Studies of the 18th Century in Italy*) を出版し，その翌年ロンドンへ来てペイターの知遇を得ることになった。

ペイターの手紙はヴァーノン・リーが前年の暮れに公刊した論集『ベルカロー』(*Belcaro*) に対する謝礼をもってはじまる。ペイターは女史が抽象的な問題を具体的に扱った書き振りを賞揚したのち，この本を読んで非常にゆたかな印象をうけたことを告げる。「あなたの本に見られるような広い知識と想像的な力の統合は，ほかではめったに見られません。もちろん並ならぬ表現の力があればこそであります。ただ一つ難を言うならば，ところどころごたごたしていることです。」これは大へんなほめかたではないか。いくらかお世辞もあろうが，よい本であったにはちがいない。

それからペイターは，近く夏の休みにイタリアへ旅行するからまた会う機会があろうが，あなたが次にロンドンへ来られるならば，その折りにお話しましょう，と親しい言葉を送っている。

こののち，ヴァーノン・リーはロンドンへ出てくるたびにペイターのところへ出入して，ペイターの妹とも交際していた。おそらく女史の芸術的趣味や研究の領域がペイターの気に入ったのであろう。ペイターに近づき，ペイターの影響をまともに受けるようになってからはペイターを意識的に模倣し，またペイターの影響を自分の流儀で発展させた。たとえばペイターの『想像的肖像』(*Imaginary Portraits*) を模倣して物語を書いたり，ペイターの『ルネサンス研究』の跡を追って『ルネサンスの想像と研究』(*Renaissance Fancies and Studies*) を著わしたり，あるいはペイターの「文体論」("Style") に着想を得て『ことばの扱いかた』(*The Handling of Words*) を書いたりしている。

言うまでもなく，ペイターの『ルネサンス研究』は特色を持った名著である。フランス中世の物語にルネサンス運動の曙光を見出し，おなじくフランス十六世紀の「スバル派」詩人に残照を見出す。ルネサンス・イタリアの芸術と文化はその中間において最もかがやかしい光を発したものと見る。リー女史の『ルネサンスの想像と研究』がペイターの著作から何を得て如何に展開したか，興味をそそられるけれども，私の手に入らなかった。それでここではあきらめるとして上にあげた『ことばの扱いかた』を読んでみよう。

ペイターの「文体論」は30ページ余りのエッセイだけれども，文学の本質と表現に関する見解をのべたもので，文学理論としてペイターの代表的エッセイの一つ。

19世紀のイギリス文壇は，散文で書かれる作品が多くなって，とくに小説と随筆の類は急激に増加してきた。ペイターはとくに文学の表現を問題とする。作家に限らず一般の人びとが自分の考えたこと感じたことを他人に伝えようとする場合には表現の仕方がいろいろある。大げさな言葉を使ったり，新奇な言葉を並べたり，余分な言葉を使いすぎたりする。しかし表現の理想を一言でいえば，文章の内容と形式の一致なのである。

内容と形式の一致というと，わかりきったことのように思われるが，実はむずかしいことなのである。考えや感じを的確に表現するには，内容に即した言葉の選択，冗漫な言葉の省略，形式の整備などが必要である。こうした作業が終って一篇の文章ができ上ったとしても，文章にはある一貫した論理性というものが望ましい。そしてその文章が作者の感情を伝えるものならば，情緒性を含んだ文章であることが望ましい。

ペイターは内容と形式の一致した作品を「よい芸術」と言って，それをつくり出すために必要な条件や努力を説き明かしてきた。そして「偉大な芸術」という用語を導入して，天才的な大作家の芸術を特別にすぐれた作品であると考えた。ペイターの「文体論」は後世の人に教えるところ多いけれども，常識的，抽象的なところも多い。

ヴァーノン・リーが，『ことばのあつかいかた』を出版したのは1922年，女史は66歳であった。もっともこの本は長年にわたって発表した論文を数篇あつめたものであるから，箇箇の論文の主題は一貫していない。私はこの中から共通の主題を扱った三，四篇の論文を抽き出して考えよう。主題というのはことばと表現の問題である。

ここにひとりの作家があって，ある経験，ある事件，もしくはある世相を書こうとしていると仮定する。作家はそれを表現するためにさまざまな言葉，すなわちいろいろな経験をあらわした言葉を脳中にたくわえている。

そのたくさんの言葉の中から選び出した言葉によって書くわけである。では，どういう標準によって言葉を選択するのか。

われわれは作品を考えるに作家だけでは片手落ちである。作家に対して他方に読者を考えねばならない。読者もまたそれぞれに多くの言葉，もしくは自己の経験をたくさんたくわえている。そして読者は作品を読む際に，自己のたくわえた言葉にもとづいて作品を理解する。読者のたくわえている言葉は作家と共通のものが多いけれども，そうでないのもたくさんある。

そこでもういち度考えてみよう。作家は自分の持っている言葉を選択して表現するのだが，なるべく読者に親しい言葉，説得力のある言葉，相手につよい印象を与えるような言葉，好奇心を起こさせるような言葉，など考慮して配合しなければならない。これに対して読者はまず作品の理解に向かわねばならないから，自己の持っている断片的な言葉を作品の周囲にあつめる。そしてできるだけ作品の内部に入るようにつとめる。

作家は読者の経験を考慮して書いたのだから，読者はその意図にこたえるように作家の経験に近づく。作家の思想，印象，情緒を把握するようにつとめるならば，まずよい読者ということができるだろう。こう考えるならば，作品は作家だけによってつくられるのではない。そこに読者が加わってはじめてほんとうの作品が成立するのである。作品は読者の協力をまって，社会的存在としての作品になる，と言える。

さて，こうして作品の制作過程を見てくると，作品を書くのにどういう言葉が適切か，どういう言葉を省略し，どういう言葉を使って引き締めるか，など実際的な技巧は教えることができる。ヴァーノン・リーはこれを「教えられる部分」(“teachable portion of the art of writing”) といっている。その一例として言葉の分析の技巧を次に原文のままあげよう。

“Think of such a word as *Sea*. It awakens in our mind an incredible number of possible visual, audible, sensible, and emotional impressions: wide, deep, wet, green, blue, briny, stormy, serene, a thing to swim or drown in, connecting or severing countries; moreover, a word which may awaken in our mind, because it has been accompanied with so many different ones, feelings of gladness or terror or sorrow. Thus, the word

Sea is one of those which suggest most, but also most confusedly." (*The Handling of Words*, pp. 45–6,) それゆえ，「海」が暗示する多くのイメージを吟味して用いることを作家にすすめるのである。

よい文章とかよい作品とかいう程度ならば，このような「教えられる技巧」に従って書きあげることができるだろう。しかしペイターが「文体論」の最後に言った「偉大な芸術」をリー女史は如何に考えたか。

リー女史によると，偉大な文学すなわちバルザックとかフロベールとかスティーヴンソンとかいうようなすぐれた文学は凡人の企及するところではない。彼らはそれぞれ非凡な才能をめぐまれた作家たちであるから，その才能を駆使して書いた作品の水準に達することはむずかしい。天賦の才は教えることができないからである。ただ次のことはいえるだろう。たとえばジョージ・エリオットは小説の中で論理的，科学的用語をよく使っている，ダヌンチオは文章の運びがのろのろして，まるで，服の裾をひきずって歩くようである。スティーヴンソンのある小説では主題と扱っている言葉とがちぐはぐになっている，——といった具合に，作家たちの言葉のあつかいかたは個性的な特徴を持っている。これを検討してその技巧を自己の作品の中にとり入れるように心掛けるならば，技巧上の達成を期することはできる。

要するに，文章や作品を書くということは，大げさに言って人類の精神的指導につながることであるから，その役割を慎重に考えて努力することが肝要である。言語表現に関するリー女史のこまかい注意は，ペイターの「文体論」の一部を敷衍した，言わば「各論」と見られる。

ヴァーノン・リーはペイターの忠実な弟子であった。親近してこまやかな影響をうけた弟子であった。散文作品においても，イタリア芸術の研究においても，文章表現の理論においても，多かれ少なかれ，影響をうけたことはいま見てきたとおりである。多くの著作を公刊しながら，文壇に忘れられ勝ちだったのは何故であろうか。

ペイターの弟子としてまずあげられるのはオスカー・ワイルド (Oscar

Wilde) である。ワイルドは評論を書き，小説を発表し，詩も戯曲もつくった。芸術観についてはペイターの深い影響から出発して芸術の各方面に及んだのであるが，耽美的，芸術至上主義的傾向を強調したのでペイターから逸脱した。しかしそのためにワイルドの個性を発揮して，却ってワイルドの芸術を世に宣伝することになった。

次にあげられるのはアーサー・シモンズ (Arthur Symons) であろう。シモンズもまたペイターの影響の中で成長し，散文作品や諸芸術の批評を書き，フランスの新文学をイギリスに紹介した。これもまた世紀末において注目をうけたはなやかな仕事であった。

このような批評家たちにくらべてヴァーノン・リー女史はそれほど注意をひかなかった。仕事が地道であったためにちがいない。そのうえ師匠のペイターにつきすぎたのではないか。つまりリー女史の仕事がペイターの傘にかくれてしまったのである。忠実にペイターの跡を追ってそこから一歩も出なかったということがその影をうすくした原因だと思われる。